

平成27年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成27年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ウルメイワシ

学名 *Etrumeus teres*

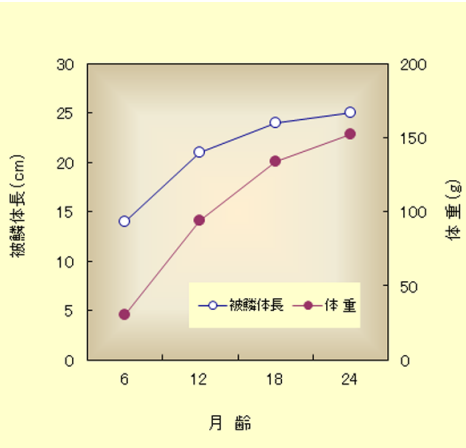
系群名 太平洋系群

担当水研 中央水産研究所



生物学的特性

寿命： 2歳前後
成熟開始年齢： 9カ月（30%）、12カ月（100%）
産卵期・産卵場： 前年10～7月（盛期は3～6月）、産卵期前半は土佐湾周辺海域中心、産卵期後半は伊豆諸島～関東近海にも広がる
索餌期・索餌場： 周年、本州～九州太平洋岸
食性： 動物プランクトン等
捕食者： 中大型浮魚等

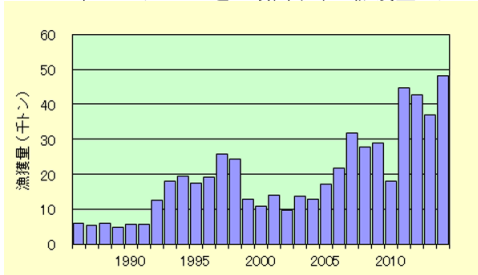


漁業の特徴

主にまき網、定置網により漁獲される。和歌山県では棒受網、高知県では多鈎釣りでも漁獲される。シラス(仔稚魚)期は船びき網で漁獲される。外国船による漁獲はない。

漁獲の動向

宮崎県～三重県の漁獲量は、1985～1991年は5,000～6,000トン台であったが、1992年以降増加し、1998年には2.5万トン前後となった。1999～2004年は減少して1.0万～1.4万トンで推移したが、2005年以降は増加傾向を示し、2014年は4.8万トンと過去最高水準の漁獲量となった。

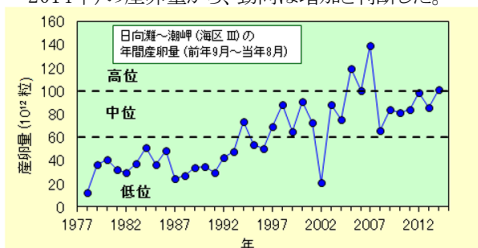
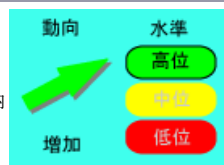


資源評価法

漁業に依存しない産卵調査結果から算出した産卵量を資源量指標値として資源状態を判断した。年間産卵量は水産総合研究センターと各都県水産研究機関の共同による改良型ノルバックネットの鉛直曳網採集結果から緯経度30分升目で集計された月別産卵量を前年9月～当年8月を1年として合計して算出した。対象海域は日向灘～潮岬(海区III)とした。

資源状態

対象海域(日向灘～潮岬)における年間産卵量は、1978年以降増減を繰り返しながらも全体としては増加傾向にある。1990年代半ばから、例外的に低かった2002年を除いて、60兆粒を超え、2007年は過去最高の139兆粒に及んだ。2008年は66兆粒と減少したが、2009年以降は80～100兆粒の範囲にある。過去36年間(1979～2014年)の年間産卵量の最大値と最小値の間を三等分し、高位、中位、低位の水準を定義すると、2014年の産卵量(101兆粒)は高位と中位の境界線付近にあるが、高位と判断した。最近5年間(2010～2014年)の産卵量から、動向は増加と判断した。



・1978年は1977年9～12月分データが無いため、最小値の判断からはずす。

管理方策

資源量指標値である産卵量は長期的に増加傾向にあり、最近年の高い漁獲量の下でも中位～高位水準を保っている。これは、再生産が順調に行われていることを示唆しており、長期的な漁獲量の増加は資源の増加を反映している。

と考えられる。従って、最近年の漁獲は資源状態に悪影響を及ぼしていないと言える。そこで、最近3年間(2012～2014年)の平均漁獲量(宮崎県～三重県)と産卵量から、算定規則2-1)に基づき、2016年ABCを算出した。漁業情報の利活用と共に、産卵調査による主産卵場の再生産状況のモニタリングを継続し、高い漁獲圧の下で産卵量の低下が見られた場合には、再生産確保のための漁獲圧軽減が必要となると考えられる。

管理基準	Limit/Target	F値	漁獲割合(%)	2016年ABC(千トン)
1.0・Cave3-yr・1.01	Limit	-	-	43
	Target	-	-	35

- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量である。Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の増大または維持が期待される漁獲量である
- ABC算定規則2-1)により、 $ABC_{limit} = \delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ 、 $ABC_{target} = ABC_{limit} \cdot \alpha$ で計算した
- δ_1 には1.0(高位水準における推奨値)、 α には標準値0.8を用いた
- γ_1 (1.01)は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/I)$ で計算した。kは標準値の1.0とし、bとIは資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間(2012～2014年))である

資源評価のまとめ

- 日向灘～潮岬(海区III)の年間産卵量を資源量指標値とした
- 資源水準は高位、動向は増加

管理方策のまとめ

- 産卵量は長期的に増加傾向にあり、最近年の高い漁獲量の下でも中位～高位水準を保っている
- 産卵量の増加から再生産が順調に行われていることが示唆される
- 最近3年間(2012～2014年)の平均漁獲量(宮崎県～三重県)と産卵量から、算定規則2-1)に基づき、2016年ABCを算出した

執筆者: 高須賀明典・梨田一也・入路光雄・亘 真吾

資源評価は毎年更新されます。